

生命について考える科目における 教育方法改善の試み

——ディベートを取り入れた授業——

**A attempt for improvement of the educational method
in the subject about 'Life'**

——On the class adopting debate——

渡 部 美穂子

1 はじめに——授業にディベートを取り入れる意味

「教わる」ことと「学ぶ」ことはどこが異なるのか。「学ぶ」ことの楽しさとは何か。大学においては現在も講義の形式で多くの授業が行われているが、講義を聴くことによって「教わる」知識は、それが受講生にとって意味のある「自分自身の」問題に関わるものと考えられていなければ、受講生にとっての身についた知識とはならない。これに対して、受講生の問題意識が引き出され、受講生がただ「教わる」だけではなく、自ら主体的に「学ぶ」ことができれば、受講生は自分の頭で考え、「学ぶ」ことの楽しさに気づき、学びをさらに深めていきたいと思うだろう。本稿においては、ともすれば一方通行的になりがちな講義形式のみの授業とは異なる方法上の工夫のひとつとしてディベートを取り入れた授業の試みについて考察していきたい。

ディベートはあるテーマについて肯定側と否定側に分かれて、定まった形式のもとで討論を行い、どちらの側の主張により説得力があったかで勝敗を競うものである。授業にチーム対抗のディベートを取り入れることにより、次のようなメリットが生じることが考えられる。

まず第1に、ディベートに勝つためにはそのテーマについてよく理解していることが必要であり、ディベートに勝つという目的を達成するため

に、学生がそのテーマに関して積極的に調査し、チームで議論することが期待できる。このような経験は、「学び」の動機づけ、「学び」の主体化につながると思われる。

また、肯定側のチームに入るか、否定側のチームに入るかを、各学生がもともと持っている意見とは無関係に、くじ引きやじゃんけんなどの方法で決めることにより、もともとの意見とは逆の立場でディベートに参加しなければならない可能性があり、また、もともとの意見と同じ立場のチームに入ることになった場合でも、ディベートの準備段階で相手側の主張とその根拠を予想し、相手側の立場に立って反論を考えておく必要がある。これは自分が従来もっていた視点を相対化する契機となるであろう。これが、第2のメリットである。

そして第3に、チームのメンバーが協力しながらディベートの準備を進めていき、本番当日も力を合わせて勝利を目指すことにより、チームワークの大切さや、リーダーシップ、フォロワーシップといったチーム内の役割分担に基づいて共同作業をすることの意味を知ることができ、学生たちは協調性や集団の中での自分の力の生かし方について考えるという、卒業後、実社会で生きていく上での重要な能力を身につける契機を得ることが期待される。

第4のメリットとして、ディベートの結果判定役となるクラスの聴衆を前にして、自分たちのチームの主張を明確に論理的に述べていこうとすることは、自己表現力、プレゼンテーション能力を伸ばしていく必要性を学生たちに自覚させることになるだろう。

授業にディベートを取り入れることによって、上記の4つのメリットが期待されるが、その実施の具体的な方法は以下の通りである。

2 ディベートの準備

まず、ディベートを実施するにあたっては、そのテーマの設定が重要となる。ひとつのテーマについて相反する立場から議論するディベートでは、なによりもまず、そのテーマが Yes と No どちらの立場にあっても

立論が可能でなければならない。誰しもが「それはこうあるべきだ」と一つの立場しかとりえないようなテーマを与えれば、ディベートは成立しえない。そして、そのテーマについて受講生がディベートを行うことが、当該授業にとってどのような意義をもつかを十分に検討した上でテーマを決定することが必要である。

今回、筆者が担当している生と死に関する授業においては、「死刑は認められ得るか」というテーマでディベートを行うことが、被害者や遺族の立場から、そして犯罪者の立場から考えることを促すであろうし、また、「脳死・臓器移植は認められるか」というテーマでは、「臓器移植を待ち望んでいる人」の立場と「突然、家族が脳死状態になった遺族」の気持ちを考えたうえでのディベートが展開され得るであろうと考えて、これらのテーマで受講生たちにグループ対抗でのディベートを実施することとした。「死刑制度」や「脳死・臓器移植」は、大学生の日常生活において身近な話題であるとは言いがたいが、上記のようなテーマでディベートすることが、「自分のいのち」と「他の人のいのち」への大学生の関心を深め、再考を促すことを期待したのである。

ディベートを効果的に行うためには、授業担当者がその方法を十分に説明して、準備作業をサポートし、ディベート実施後に学ぶ課題との関連について総括を行うことが必要である。準備作業として、まず、ディベートの方法をよりわかりやすく提示するために、他の授業で行われたディベートの様子をビデオで視聴させた。映像を通して具体的なディベートの流れを知ること、自分たちの意見をいかに短時間でまとめて表現するかということを念頭に置いた準備ができるであろうと考えたからである。

次いで、それぞれのテーマに関する参考文献や参考にし得るインターネット上のホームページの URL を提示した。図書館の積極的な活用を指示するとともに、そのテーマに関して身の回りの方々、例えば友人や親、可能であれば小中高時代の先生などと話すことも問題を多角的に捉える上で有効であることを伝えた。また、「臓器移植」に関しては、渡米して多臓器移植を行った乳児とその両親の活動を紹介したドキュメンタリーと、娘の臓器を提供した父親の後悔の念を記録した映像を視聴させた。「死刑制

度」に関しては、ディベート実施に先立って、「死刑制度の是非についてどのように考えるか」という題でレポートを課して、各自でこの問題について考えさせた後に、10名程度のグループでのディスカッションを行った。

そして、それぞれのテーマに関して、受講生を YES（肯定側）チームと NO（否定側）チームにグループ分けを行い、以下の順にディベートを進行していくことを示した。

- (1) 冒頭陳述：YES チーム (3分)
- (2) 冒頭陳述：NO チーム (3分)
- (3) 作戦タイム (1分)
- (4) 反論：YES チーム (3分)
- (5) 反論：NO チーム (3分)
- (6) 自由討論：YES チーム、NO チーム双方からの発言可 (15分)
- (7) 作戦タイム (1分)
- (8) 最終弁論：YES チーム (3分)
- (9) 最終弁論：NO チーム (3分)
- (10) 判定 (ディベートを聴いていた受講生による)

さらに、ディベートはチームで行われるため、事前にチームで意見の統合を図るための話し合いが重要であること、そのための準備時間をできるだけ多く確保すること、その成果を、配布した「ディベート準備プリント」(表1)にまとめていく作業をしっかりと行うべきことを伝えた。

3 ディベートの実施

ディベート実施の当日は、まず、教室の黒板にその回のテーマを板書し、Yes 側と No 側のメンバーを左右に位置させた。それぞれの意見はフロアー（聴衆）にしっかりと伝わるよう教室の大きさに応じてマイクを用いた。時間をきちんと統制するために、タイムキーパーを配置し、ストップ

表1 ディベート準備プリント

ディベートのテーマ：				
ディベートの実施日： 年 月 日				
チームの立場： YES NO				
チーム名：				
	学部	学科	番号	氏名
リーダー				
メンバー				
冒頭陳述の要旨				
*				
*				
*				
*				
*				
予想される相手チームの立論			相手チームの立論に対する反論	

が、これらは果たしてどれほど実現されたのだろうか。ディベート実施後に「ディベートを行って考えたこと」という題で受講生に課したレポートから、その点を検討してみよう。

まず、「学び」の動機づけという点に関しては、学生は次のように書いている。

- *文献やインターネットを使い、自主的に調べたことで、根拠のある知識と自信ができました。図書館の本をたくさん読んだり、インターネットで調べた事実や書かれた様々な意見をふまえ、自分の意見をもつことを学びました。また、人と議論することはとても勉強になりました。
- *ディベートをやる前とやった後では、自分に変化があったと思います。やる前は怖かったけど、自分の意見をちゃんと主張したり、いろいろ調べたりと、いままでしてこなかったことをして、新しい自分の能力が開発されたと思います。いろいろなところから資料を集めたりして用意するのがたいへんでしたが、それにより自分に知識が身についたので、参加してよかったです。
- *ディベートに向けてのミーティングでは、わからないことは積極的にメンバーと話したり、調べたりして、議題についての知識を増やそうと努力しました。何度も夜遅くまで集まり、ディベート前は寝不足の日が続いたりしましたが、それとは比べものにならないほどのいい経験ができたと思います。この授業では「考える」ということを積極的に行ったように思います。様々なことに疑問を持ち、自ら考えることによって、学びの幅はいくらでも広がるんだということをこの授業で学べたように思います。
- *私は昔から人前で何かするとといったことが苦手で、いつも積極的になることができなかった。しかし一念発起してこのディベートに参加し、様々なことを学ぶことができたので、自分に対して非常にプラスになる経験となった。この経験を活かし、これからも自分を磨いていきたいと考える。

学生たちはディベートに向けての準備を進めていく時間を自分にとって

有意義なものと感じ、主体的・自主的に考え、学んでいくことの楽しさを理解していったようである。

次いで、視点の相対化という点に関してはどうだろうか。以下のように学生たちはレポートに記している。

- * ディベートで扱ったテーマは、どれも一つの答えが出るようなものではなかった。一見、納得しそうな意見にも欠点はあり、いつも授業が終わるころには、もともと自分で正しいと思っていたことが本当に正しいのか分からなくなっていた。
- * 自分の意見ではなく、立場を指定されて、その立場の意見を考えてくるのは難しかった。でも、ディベートをやってみて、意見をぶつけ合うのはおもしろいことだなと思った。こういう考え方もあるんだと発見できたり、勝敗がつくから勝ちたいし、そのための準備も楽しかった。ディベートのための集まりの中で、いろいろな意見があると感じ、自分の視野の狭さがわかって、物事をもっといろんな角度からみていこうと思うようになった。ディベートに参加して良かった。
- * この授業では、たくさんの人のそれぞれ違った様々な意見を聞く機会が多くあり、「こんな意見もあるんだ」、「あんな意見もあるんだ」と、物事や自分自身の意見を様々な方向から見ることができるようになる。ディベートでいろんな人の意見を聞くことで、一つの事柄に対しても様々な見方があることを知った。視野を広げていろんな問題に取り組む必要を考えるようになったと思う。
- * 今回のテーマで私は Yes 側の考えだったのですが、No 側チームとして意見を考えていくうちに No 側の考えに納得している部分があり、自分の考え、視野がぐんと広がっていく気がしました。何かについて意見をもつときは、そのことについて深く考えなければならないと思いました。私は今まで何となく賛成や反対などと言ってきたけれど、それではすぐに考えはくつがえりません。ディベートを聞いていてしみじみとそう感じました。最初は YES と思っていたことも、他の人の主張を聞いてるとすぐに NO に変わったりする。ディベートに参加して、どちらかの意見をしっかり持って反対意見の人と討論すると

いう経験ができてよかったと思います。

- *自分とは違う意見や考えを聞いて、より自分の考えが深まった部分もあったし、考えの幅が広がったように思いました。自分では思いつかなかったような意見もあったので。
- *ディベートのための話し合いに参加し、同じグループの人たちと意見交換をすることにより、私の視野がいかに狭かったかということを実感しました。その結果、私の当初の考えが大きく変わってきました。ディベートすることの楽しさを知ることができたので、またこのような機会があったら、ぜひ参加したいと思います。

ディベートを行うことを通して、学生たちは、「意見交換をして自分とは違った方向からの意見を知り」、「当初の考えが大きく変わって」くることを実感し、「視野を広げていろんな問題に取り組む必要を考えるようになった」と考えている。ここからはディベートが「視点の相対化」の契機となっていることがわかる。

それでは、自己表現力、プレゼンテーション能力に関してはどうか。学生たちは以下のように記している。

- *すごく悔しかったのは、ハッキリと自分の意見を述べることができなかつたことです。思っていることはたくさんあったのですが、それをうまく言葉でまとめることができず、結局黙ったまま終わってしまいました。思っているだけでは伝わらないということを痛感した場面でした。どんな小さなことでもよいから、自分の言葉で思ったことを伝えることはとても大切だと思いました。今のままの自分の状態ではだめだと思いました。意見を持つこと、伝えたいことを明確にさせること、それを表に出して発信することができなければ、結局それはなかつたことと同じです。ちゃんと自分の言葉で人に伝えるということをもっともっとトレーニングしていきたいと思います。
- *ディベートで私も思いついたことがあったのですが、それがはっきりと言葉となって伝えられないのにすごくもどかしさを感じました。言いたいことがあるのに伝えられない。同じチームの助けとなるように話したいと思っていたのですが、結局あいまいな言葉で終わってしま

ったので、すごく悔しいです。

- * ディベートに参加してみて、根拠のある聴衆を納得させるような論を打ち立てることの難しさを学ぶことができた。しかし、どうやってみんなを納得させるのかを考えるのは楽しかった。
- * 人の前に立つと自分の思っていることがこんなにも言葉にならないとは思わなかった。また発言しても相手に真意が伝わっていないことがあり、ディベートでの発表の難しさを知って勉強になった。自分自身あまり人前での発言が得意なほうではなかったが、今回のディベートを通して、それも少し克服された気がする。
- * 私は Yes 側でディベートに出ましたが、喋れなかった。自分の意見を皆の前で言うということはすごく大事なことだし、経験しておいて損はないと思う。
- * (ディベートを) やらせていただけてよかったです。あんな大人数の前でできることは滅多にないと思いますし、少しは度胸がついた気がします。

学生たちは「人の前に立つと自分の思っていることがこんなにも言葉にならない」ことに強い悔しさを感じ、「自分の言葉で思ったことを伝えることはとても大切だ」と気づき、「意見を持つこと、伝えたいことを明確にさせること、それを表に出して発信すること」を切に望むようになっていく。この願いに基づく努力は、やがて自己表現力、プレゼンテーション能力の向上へと結びついていくに違いないと思われる。

そして、グループワークの生む協調性という点についてはどうだろうか。学生たちはレポートに次のように書いている。

- * ディベートするにあたって、Yes チームの皆で話し合っただけで準備する機会が何回もあったのですが、同じ Yes チームの意見の中にも個性が見られ、広い視野で話し合いを進めることができました。一人の意見だけでは主観的な内容になってしまうので、グループワークの大切さを改めて実感しました。一人一人意見を持っていて誰かに頼りっぱなしということもなく、全く関わっていない感じの人もなく、チームが一つに慣れたような気がします。

- * 何度か昼休みに集まって相談する中でいろいろな人の意見が聞けて面白かったです。一人では出ない意見も他の人の意見を聞き、自分の意見も次々出てきたので、ここは大勢でできた利点だと思います。NO チームでしたが、チームのほとんどの人が YES 側の意見をもっていて、NO チームとして論拠を探したり、反対の意見を考えたりすることが進まず、チームの意見をまとめるのがとても難しかったです。皆と何回も話し合い、意見を出し合ううちに、チームとしての結束力もつき、話し合いを重ねることの大切さを実感しました。
- * 私たちのチームは休日に集まって冒頭陳述を考えたり、予想される反論に対しての私たちの意見を考えたりするなどの努力をした結果、予想以上に良いディベートができたのではないだろうか。また、チームの人々と一緒に意見を出したりすることによって、自分の意見を押しつけるのではなく、他人の意見もきちんと聞くことができるという協調性も学ぶことができたので、たいへん良かった。
- * グループでの話し合いでは、自分の意見や調べたことを発表し合っ、グループの意見を一つにまとめていったが、相当時間がかかった。だが、その時間はとても有意義なものであったと思う。そしてグループ内での役割分担が生まれ、ディベート当日にもその役割が活用された。そのおかげで責任感も生まれ、より意欲的にディベートに参加することが出来た。
- * 私は No チームのリーダーでしたが、リーダーらしいことはできていませんでした。資料の印刷や配布、集まるときの指示を出しただけでした。しかし、本番ではひとりひとりが発言をしてくれて私を助けてくれました。これによって、リーダーもみんなに支えられていることを実感しました。ディベートというものは本当に自分の成長につながるものだと思います。

学生たちの記しているように、グループワークの遂行を通じて、「意見もきちんと聞くことができるという協調性」、「チームとしての結束力」、「グループ内での役割分担」をしっかりと学び取っていることがわかる。

以上のように、当初、ディベートを授業に取り入れるメリットとして考

えていた、「学び」の動機づけ、視点の相対化、グループワークの生む協調性、自己表現力、プレゼンテーション能力の伸張という4つの点は、かなりの程度、達成されたと考えられる。

5 今後の課題

以上に述べてきたように、ディベートを授業に取り入れることには意義があると思われるが、これからの課題として、2つの点について記しておきたい。まず、ディベートの質をさらに向上させるためには、準備段階での受講生への指導・助言を充実させることが必要である。この指導・助言は、教員が行うだけでなく、すでにディベートを経験した先輩（上級生）から行うことも有効であると思われる。前年度の受講生をアドバイザーとして参加させ、上級生から下級生へディベートについて指導させた場合、上級生にとっては下級生にアドバイスすることが自分自身の学びの再認識になり、下級生にとっては教員とは別の視点からのアドバイスを受けることができるというメリットがある。そして、まじめに勉学に取り組んでいる上級生は下級生にとってもっとも身近な目標像であり、彼らとの交流によって学びにとってのあるべき姿勢が意識化されるという点も挙げられよう。さらには、このように下級生への助言のために努力し、自らの学びを再度、検討し直している上級生を、成績評価の形でさらに励ましていくようなシステムづくりも必要であろう。

2点めとして、受講生の視野をさらに広げ、学びを深めていく契機となるように、単一の授業の枠を超えた他流試合の場を提供していくことが有意義である。同一大学内の、類似のテーマを扱う他の授業の受講生とのディベート、及び、他の大学の類似のテーマを扱う授業の受講生とのディベートが、そのような場となるだろう。

例えば、医学部や看護学部、理学部など理系の学部が提供する生命倫理に関する科目の受講生と、文学部や法学部、経済学部といった文系の学部に所属する教員養成関連科目の学生とが「いのちの教育」についてディベートを行うことなどがあげられる。これらはいのちを扱う立場として、あ

るいはいのちの大切さを教育する者としてのいのちをどのように考えるのか、また、そのような職に就く人間はどのようにあるべきか、子どもたちにどのような教育を提供できるのか、などについて異なる視点から深く追究するための格好の機会となることが期待できる。

これらの交流の場は、授業者と他の授業者との意見交換の機会ともなり、互いの授業の質を高めていく上での刺激となり得るであろうし、さらには、ディベートをはじめとするいろいろな授業方法上の工夫を可能にする教授システムの改善へとつながっていく可能性を秘めていると考えられるのである。